

「実現する神の言葉」

マタイによる福音書 2:13-23

エレミヤ書 31:16-17

2024年1月14日
野村 友美 師

<クリスマスの出来事>

気がついたら、もう1月も半分まで来ましたね。年明けから大地震や事故の辛いニュースが続いている今年ですが、いま悲しみ痛んでおられる方たちがみんな慰められて、必要を満たされて、何かを喜び祝う時間が回復されますように、心から願います。

先月、私たちはクリスマスの出来事をお祝いしました。仁風園でのクリスマス会から始まって、子どもクリスマス会、クリスマス礼拝と祝会、クリスマスイブの燭火礼拝。

賑やかで楽しい時間も、静かで厳かな時間もあって、とても「クリスマスらしいクリスマス」だったと思います。特に、子どもたちが楽しくお祝いしている姿がたくさん見られて、私にとって本当に嬉しいクリスマスでした。

さて、「クリスマスらしいクリスマス」とは言いましたが、世界で最初のクリスマス、イエス様がお生まれになった時はどんな「クリスマス」だったのでしょうか。家畜たちの居場所で、布にくるまれて飼い葉桶に寝かされている一人の赤ちゃん。生まれたばかりのイエス様を囲んで、マリアとヨセフ、天使のお告げを受けた羊飼いたち、そして東の国からきた学者たちが、その誕生を喜び祝いました。世界で最初のクリスマス。派手な賑やかさはないけど、静かで温かくて平和な光景をきっと誰もが思い浮かべるでしょう。ですが最初の「クリスマス」は決して、静かで温

かくて平和なだけじゃなかったことを、今日のマタイの福音書は伝えています。

<ヘロデ王の虐殺>

東の国からはるばるエルサレムまでやって来た、占星術の学者たち。彼らは「ユダヤ人の新しい王様」が生まれたことを教える星に導かれて、イスラエルの首都エルサレムにたどり着きました。この時代、イスラエルはローマ帝国の支配下にあって、皇帝から任命されたヘロデという王が、イスラエルを治めていました。

ヘロデは王族の出身ではありません。

彼は元々ユダヤの軍人で、ローマの皇帝や役人に取り入って王様の座に着けてもらった人です。自分の知恵と力で王座を手に入れた、そんなヘロデ王にとって、東の国の学者たちが運んできた知らせは、まさに青天の霹靂でした。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか？わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

この学者たちの言葉を聞いて、ヘロデは不安で真っ青になりました。星を動かすなんてことは、神様にしかできません。学者たちが言っているのは、神様が預言者を通して約束しておられた救い主、メシアのことに違いない。そう思ったヘロデは、大慌てで聖書の専門家たちに調べさせました。そして、メシアはベツレヘムで生まれたはずだ、というところまで突き止めると、ヘロデは学者たちにこう約束させました。

「メシアが見つかったら、居場所を知らせてくれ。私も行って拝みたいから。」

もちろん、ヘロデはメシアを拝むつもりなんかありませんでした。自分の王座を守るために、こっそりメシアを殺そうとしたんです。

ですが学者たちは「ヘロデのところへ帰るな」と

いう神様のお告げを受けて、イエス様に会ってから、今度は別の道を通して自分たちの国に戻りました。待てど暮らせど帰ってこない学者たちに、ヘロデはしびれを切らしたんでしょう。学者たちがどうしたのかを調べさせて、彼らが約束を破ったことを知ったようです。怒り狂ったヘロデは、恐ろしい行動に出ました。ベツレヘムとその周辺の2歳以下の男の子を全員、殺させてしまったんです。救い主イエス様の誕生によって、無関係の幼い子どもたちが虐殺された。静かで平和なクリスマスとはほど遠い、痛ましくて残酷な出来事です。

しかもマタイの福音書はこう繰り返しながら、今日の場面を物語ります。

「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

じゃあベツレヘムの子どもたちは、神様の言葉が実現するための犠牲になった、ということなんですか？すべての人の救い主、イエス様がこの世界に登場するために、幼い子どもたちの命が利用された、と福音書は伝えているんでしょうか？

いいえ、そうではありません。福音書記者であるマタイは、「旧約」と私たちが読んでいる聖書の言葉をちょっと不思議なやり方で引用しています。ここで挙げられている預言者たちの言葉はどれも、救い主誕生の予告とは直接関係がない言葉ばかりです。しかも最後の「彼はナザレの人と呼ばれる」なんていう言葉は、旧約聖書のどこにも見当たりません。

いったいどうしてマタイは、こんな不思議な引用の仕方をしているんでしょうか？

この謎の答えが、マタイが私たちに伝えたいことを教えてくれると思います。

<エジプトへ逃げる>

東の国の学者たちが帰って行った後、イエス様を産んだマリアの夫ヨセフは夢で天使からこう告げられました。今すぐ起きて、マリアと子どもを連れてエジプトに逃げなさい。

ヘロデがこの子を探し出して、殺そうとしているから。夢から覚めたヨセフは、すぐに言われた通りにマリアとイエス様を連れて、エジプトへと逃げ込みました。

そしてヘロデが死んで、危険がなくなるまで、エジプトに滞在しました。「それは、『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

そうやってマタイが引用しているのは、旧約聖書のホセア書の言葉です。

預言者だったホセアは、昔エジプトで奴隷として扱われていたユダヤ人たちを神様が救い出された出来事、出エジプトの記憶を呼び起こすために、この言葉を語りました。

かつてエジプトのファラオは、ユダヤ人の数が増えてきたのを恐れて、生まれてきた男の子をナイル川に放り込んで殺してしまえ、と命じました。奴隷たち、特に男性の数が多くなり過ぎたら、監視するのも、力づくで押さえ込むのも難しくなります。大人数になったユダヤ人たちが、いつか反乱を起こして、自分の権力を奪おうとするかもしれない。

それが、ファラオにとっては恐ろしかったんでしょう。支配者としての立場を守りたくて、ファラオもヘロデも同じ方法を選んだんです。

抵抗する力がない、弱くて小さな子どものうちに、不安の種になる人々の命を根こそぎ奪う、という方法を。どうしてそんな残酷なことができるのか、と思わずにはられません。ただ、権力

とか武力とか支配力という「力」は時に、持つ人の感覚を狂わせてしまう。それは古代のエジプトやイスラエルに限ったことじゃなくて、世界中の国の歴史が今現在も証明し続けています。せっかく自分のものにした力を、誰にも渡したくない。もっと多くの人を支配して、もっと大きな力を手に入れたい。そんな力への欲望は、弱い立場に置かれている人たちを押しつぶしながら果てしなく膨らんでいくものです。このことを思うとき、マリアとヨセフが幼いイエス様を連れてエジプトに逃げ込んだのは、とても皮肉なことだと感じます。

かつて、子どもたちを殺す支配者から救い出されたはずの民族が、今度は自分たちの中で同じことを引き起こそうとしている。ヘロデ王の虐殺から逃れるために、当時いちばん安全だった避難場所が、彼の権力が届かないエジプトだったんです。

『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

マタイが引用した預言者ホセアの言葉は、改めて私たちに思い起こさせます。

人間の罪が繰り返す悲劇に、神様もまた繰り返し救いの手を伸ばされる、ということ。

<実現する神の言葉>

訳も分からないまま、幼い子どもたちを殺されたバツレハムの人々の嘆きにも、マタイは預言者エレミヤの言葉を引用します。ラマで上げられた、嘆き悲しむ声。このエレミヤの言葉が描いているのは、かつてユダヤ人たちがバビロニアに侵略されて、多くの人々が連れ去られた、「バビロン捕囚」と呼ばれる出来事です。

あの時も、たくさんの命が理不尽に奪われた。

人々は安全を奪われ、故郷を奪われ、生活を奪われ、自由を奪われた。そんなマタイの声が、エレミヤの言葉に重ねられているようです。

子どもたちを思って泣くラケルは、イスラエル民族の祖先、アブラハムの孫であるヤコブの妻の名前です。バビロンとの戦争で、ヘロデ王の虐殺で、繰り返し奪われる子孫たちを思って、ラケルは今も泣き叫んでいる。誰も慰められないほど嘆き悲しんでいる、とマタイはエレミヤの言葉を借りて、繰り返される罪の深さを訴えます。ですが、マタイが訴えているのはそれだけじゃありません。彼が引用しているエレミヤの言葉には、こう続いているんです。

「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。

あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る。」

(エレミヤ書 31 : 16-17)

人間の罪が繰り返す悲劇に、神様の救いの手もまた繰り返し伸ばされる。繰り返し流される涙をぬぐって、神様が新しい希望を見せてくださる。この言葉もまた実現した、とマタイの福音書はここから、イエス様の出来事を語り続けるんです。ヘロデ王の死後、ヨセフは再び夢で天使のお告げを受けて、マリアとイエス様と一緒にイスラエルへ戻りました。首都エルサレムの辺りは、ヘロデ王の息子で、ヘロデに似て残酷な性格のアルケラオが後を継いで治めていました。ですから天使はヨセフたちを、彼らの故郷で、別の王が治めているガリラヤ地方のナザレという町に行かせました。

「彼はナザレの人と呼ばれる」とマタイが引用した言葉そのものは、先に言いましたように、旧約聖書には見当たりません。

ただ、ここでマタイは「預言者たちを通して言われていたこと」が実現した、という言い方をしています。

「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛み」と預言者イザヤが歌ったあの救い主が、私たちの真ただ中に来られた。何も特別なことはない田舎町ナザレのような、何も特別じゃない人々の間で、神様の愛に仕える僕として、救い主は働かれる。

誰か一人の預言者の言葉じゃなくて、預言者たちみんなを通して伝えられていた救い主の姿を、マタイはここで「ナザレの人」と呼んだんです。救いを約束なさった神様の言葉が、イエス様の誕生で実現した。このことを、マタイは繰り返し伝えています。ベツレヘムの幼子たちの命を奪ったのは、私たち人間が歴史の中で何度も繰り返してきた罪の働きです。何回でも神様の愛を無視して、裏切って、神様が与えた命を踏みこじる。そんな人間の罪が繰り返し引き起こす悲しみから、嘆きから、すべての人を救い出して解放するために、神様の独り子はこの罪の暗闇の真ただ中に来られました。ヘロデ王の虐殺から逃げ延びて、成長したイエス様はやがて、イスラエルとローマの権力者たちの手で、十字架につけられて殺されます。無実の罪を着せられて、痛みと屈辱と孤独を味わい尽くして、私たち人間の暗闇を一身に背負って死なれました。

すべての人の罪の責任を、身代わりに背負うために。繰り返す罪からすべての人を解放して、新しい命で生かすために。

神様からの愛と救いをすべての人に実現するために、2000年と少し前のイスラエルの片隅

に、イエス様は生まれてこられたんです。

暴力と絶望を繰り返し続ける罪の連鎖から、すべての人を解放するために、預言者たちが予告した救い主は、死の暗闇を破ってよみがえられました。

神様は遠くのどこかじゃなくて、私たちの暗闇の真ただ中で働かれる。私たちの罪が生み出す悲しみと絶望を破って、新しい希望を見せてくださる。この約束の言葉がイエス様によって実現した、とマタイの福音書はここで宣言しているんです。

私たちが生きているこの世界は、今もなお罪の暗闇に覆われています。戦争で、理不尽な暴力で、環境破壊による災害で、今この時も多くの方の命が奪われ、安全が奪われ、故郷が奪われ、生活が奪われ、自由と尊厳が奪われています。悲しみ泣き叫ぶ声は、今も私たちの世界に響き渡っています。

それでも、神様の言葉は確かに実現されました。私たちの罪の真ただ中で働かれる救い主、イエス様がお生まれになりました。

「あなたの苦しみは報いられる、あなたの未来には希望がある」と語りかけて、嘆く人々の涙を拭ってくださる神様の言葉は、イエス様によってこれからも実現され続けるんです。

イエス様を信じて従う者たちを通して、教会を通して、この世界の暗闇の中で神様の愛と救いの言葉は実現され続けていく。マタイの福音書が語るこの確信を、今日、私たちは改めて受け取りましょう。

暗闇の中で嘆くすべての人の涙を、イエス様が拭ってくださいますように。ここにいます一人一人の思いが、言葉が、行動が、イエス様の働きのために用いられますように。

お祈りいたします。